



Title	児童福祉領域における対人援助職のキャリア発達支援 —トラウマインフォームドシステムの構築を目指して—
Author(s)	吉村, 拓美
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101602
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 吉 村 拓 美 ）

論文題名

児童福祉領域における対人援助職のキャリア発達支援
—トラウマインフォームドシステムの構築を目指して—

論文内容の要旨

本研究は、専門職であると同時に公務員として、組織集団のなかでキャリアを発達させてきた児童福祉領域の対人援助職の語りを質的及び量的に分析して仮説生成を行なった探索的研究である。一部に、筆者による当事者研究が含まれる。研究の成果としては、現場の貴重な語りを時間軸で経過を追って分析し、多職種連携において支援者間で生じうる二次的トラウマティックストレス（STS）と回復を可視化し、対人援助職に好ましい並行プロセスを提供するスーパービジョン（SV）システムを補完する安全策としてのピアグループSVと、トラウマインフォームドケア（TIC）を前提としたシステム（TIS）構築に向けた取り組みとしてラップアラウンドの2点を提案した。

同時に、児童福祉領域の対人援助職の総体として評価するには、検討の余地がある。時代が移り変わったとしても、しばらくは児童福祉領域においてSTSを体験する対人援助職はなくならないと思われる。一步ずつ、対人援助現場に好ましい並行プロセスを生じさせるために、TICを国内の文脈に最適化しながら、TISとしての社会づくりを進める歩みを続けていくことによって、トラウマのメガネを装備している人が増えることが期待される。TICが対人援助の専門職に限らず、地域社会のあらゆる立場で標準装備されることによって、巡り巡って当事者にとっても回復しやすく、早期発見や未然防止に繋がりやすい社会が実現されると論じた。

本研究の概要は以下の通り

本研究は**3部構成**である。**序章**の第1節では本研究の問題意識を述べている。児童福祉領域の対人援助職のキャリア発達を支援する必要性を整理し、支援者の心理的危機に至るリスクを回避するために、具体的解決策を検討することには意味があると示した。第2節では本研究の概要を示した。

第I部では、理論的検討を行った。**第1章**で児童相談所（以下、児相とする。）や児童福祉司、キャリア発達、共感性疲弊、支援者支援学、メンタライゼーションといった用語を整理した。

第2章では、論点整理の中で抽出された課題として、特に児童福祉領域の対人援助職の安全なキャリア発達に向けた環境構築について文献研究を行い、実装科学の知見から当事者の視点を実装することを重視した（**研究1**）。

第3章では、理論的検討を総合して本研究の目的と構成を整理し、図示した。

第II部では、実証的検討を行った。**第4章**では実際に、児童福祉領域の対人援助職が業務継続を困難に感じることはどのような背景があるのか、特に他領域から配属されることがある児童福祉司について、心理職及び近接する他領域の対人援助職がキャリア移行によってどのような経験していたのか複線経路・等至性アプローチ（TEA）を用いて継時的にプロセスを分析し、キャリア発達におけるSTSの影響を示した（**研究2-1及び研究2-2**）。

第5章では、休職者や離職者を減らし、業務継続の可能性を高めるためにはどのような支援が準備されると良いか、特に児童福祉司を指導教育する立場から、複数の児童福祉司がピアな立場で受けるグループSVを対象として分析し、好ましい並行プロセスのバリエーションを増やし、現状を補完するシステム整備を提案した（**研究3**）。

第6章では、支援者にとっては被支援者を支援することと同程度に困難を感じることを推測される、支援者ネットワークにTICを実装することによって、支援者のSTSを解消することに繋がり、最終的には当事者に好ましい並行プロセスが提供されることが期待されることをプロセスモデルから可視化した（**研究4**）。

第III部では、考察を行った。**第7章**では、各研究を総合して、対人援助職のキャリア発達支援になにがあると良いか、中動態、バウンダリー、正義の文化等のキーワードから考察した。

第8章では結論として、今後の研究の方向性について論じ、本研究の限界を整理した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (吉 村 拓 美)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	野坂 祐子
	副 査	教授	野村 晴夫
	副 査	准教授	管生 聖子
	副 査	講師	直原 康光

論文審査の結果の要旨

本研究は、児童福祉領域における対人援助職へのキャリア発達支援について、児童福祉領域の対人援助職の語りを質的及び量的に分析したものである。現場の語りを時間軸で経過を追って分析し、多職種連携において支援者間でも二次的トラウマティックストレスが生じうる点を可視化した。対人援助職に好ましい並行プロセスを提供するシステムとして、ピアグループスーパービジョンとラップアラウンドに注目し、トラウマインフォームドシステムの構築に向けた具体的な提案につなげている。

本研究は、以下の3部構成である。序章では、第1節で本研究の問題意識が述べられ、児童福祉領域の対人援助職のキャリア発達に焦点を当てキャリア発達を支援する必要性が整理されている。第2節では本研究の概要が示されている。

第Ⅰ部では、理論的検討が行われた。第1章で、児童相談所や児童福祉司、キャリア発達、共感性疲弊、支援者支援学といった主たる用語を整理した。第2章では、論点整理の中で抽出された課題として、特に児童福祉領域の対人援助職のキャリア発達に焦点を当てて、安全なキャリア発達に向けた育成環境づくりについて文献研究が行われた（研究1）。第3章では、理論的検討を総合して、本研究の目的と構成が整理されている。

第Ⅱ部では、実証的検討が行われた。第4章では、実際に児童福祉領域の対人援助職が業務継続を困難に感じることはどういった背景があるのか、特に他領域から配属されることがある児童福祉司について、心理職及び近接する他領域の対人援助職がキャリア移行によってどのような経験をしていたのかを複線径路・等至性アプローチ（TEA）を用いて継時的なプロセス分析を行った（研究2-1及び研究2-2）。第5章では、休職者や離職者を減らし、業務継続の可能性を高めるためにはどういった支援が準備されると良いか、特に児童福祉司を指導教育する立場から、複数の児童福祉司がピアな立場で受けるグループSVを対象として分析した（研究3）。第6章では、共感疲労や二次受傷、トラウマの再演、並行プロセスといった支援者支援学の概念を用いて、支援者にとっては被支援者を支援することと同程度に困難を感じる事が推測される多職種連携について検討している（研究4）。

第Ⅲ部は考察であり、第7章では、各研究を総合した考察が論じられている。第8章では結論として、今後の研究の方向性について論じ、本研究の限界が整理されている。

本研究は、児童虐待対応を中心とする児童相談所等をフィールドとし、児童福祉司等へのインタビューから児童福祉領域で働く支援者の声を聞きとり、手続きに則って分析がなされている。先行研究の整理からも明らかにされているように、日本の児童福祉領域における業務過多や人材育成は喫緊の課題として社会的意義の高い研究課題である。現場職員としての当事者性を有しながら、質的及び量的な研究法を用いて多面的に現場の実態を把握した本博士論文は、きわめて独自性が高く、実践的である点が高く評価できるものである。

よって、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。